学びや タイムスリップ

京では日本画授業も重視

今から100年以上前、明治時代の絵画教科書を紹介します。写真の2点は1893(明治26)年に作られた『小学日本画初歩』という教科書で、京都の小学校で広く使われていました。その内容を見てみると、墨と毛筆を使って手本を写し、筆運びの練習をするものだったことが分かります。京都ではこのような教科書を使った日本画の授業が特に盛んに行われていました。

近代的な図画教育は、西洋の文化を取り入れる文明開化の一環として始まりました。それゆえ全国で、西洋の図画手本を翻訳したり、引用したりして作られた教科書を使って鉛筆画を学んでいたのです。

しかし、京都では鉛筆画だけではなく毛筆画すなわち日本画を教えるべきだという意見が出てきました。日本で最初の画学校として設立された京都府画学校で教壇に立っていた画家たちは、1885(明治18)年、小学校以上の普通教育における図画を日本画にすべきであるという建議を政府にしたと言われています。

こうした考え方の根拠の一つに、日本画の技術が染織、陶磁などの工芸に直接応用でき、職工を育てることにもつながるという理屈がありました。このような風潮もあり、京都では小学校教育に毛筆画を課すようになりました。そこで作られたのが日本画の教科書です。

驚くのは、そうした教科書の多くが当時第一線で活躍する有名な画家によって著されていたことで、画家が小学校教育をいかに重視していたかがうかがえます。

1888(明治21)年ごろから次々と日本画教科書が発行されましたが、中でも京都で特に多くの小学校で使われたのが、四条派の画家森川曽文の著した『小学日本画初歩』でした。全部で8巻に分かれていて、最初の巻では丸や線などの単純な形を写すことから始め、学年が上がると動物や植物の複雑な造形にチャレンジするようになっています。

描くのは同じチョウでも、初級用の写真1から上級用の写真2へと段階が上がっていくことが分かりますね。現代の図画工作の教科書ともずいぶん違っていたのです。

（京都市学校歴史博物館 学芸員 森光彦）

◇

今回紹介した『小学日本画初歩』は、学校歴史博物館（下京区）で25日に始まる企画展「日本画開拓の時代―明治を生きた 京の画家―」で展示します。

写真1、森川曽文著「小学日本画初歩巻之二」(1893年)

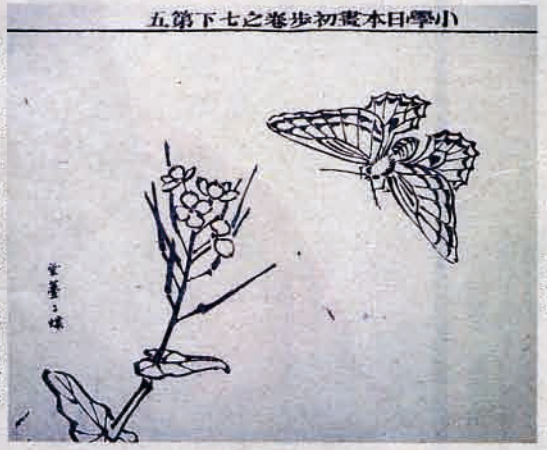

写真2、森川曽文著「小学日本画初歩巻之七」(同)